

2016年度 冬山合宿 八ヶ岳



雪煙をまきあげる赤岳

記録 福澤 卓三

日時 : 2016年12月26日(月)～12月29日(木)

メンバー : L福澤卓三、富岡英俊

コースタイム

12月26日(曇)

JR 目黒駅(7:00)－八ヶ岳 IC(8:40)－美濃戸(11:30－12:30)－赤岳鉱泉(14:30)

12月27日(雨・夜雪)

停滞

12月28日(晴)

赤岳鉱泉(6:30)－行者小屋(7:15)－文三郎尾根(8:30)－行者小屋(9:30)－
赤岳鉱泉(10:30－11:45)－美濃戸(14:00)

12月26日

JR 目黒駅で計画どおり無事に合流して中央高速にのる。天気予報は明日は雨だよ、なんて話をしながら、スマホのアプリが 9 時にアップデートされるので見てみようとか八ヶ岳 IC で休憩しながらスマホを確認すると、西穂高の明日の3時間ごとの情報が出ていて、登山コンディションはABCのCランクで20~30mの風が吹くとの予想している。28日もコンディションが悪い。通常の天気予報もかんばしくなく、最初からわかっている、みすみす停滞するのももったいない気がする。行ってから判断するには合宿日数が少なく時間が足りない。ここなら甲斐駒ヶ岳でも八ヶ岳でも行かれる。せっかく来たのだから八ヶ岳にしようと思い、横須賀に電話して美濃戸に向かう。美濃戸口から雪もなく美濃戸まで車で入れ、時間を節約できた。(このときは下山時に緊張して美濃戸口まで下るとは思いもよらなかった。)



入山時の赤岳山荘(美濃戸山荘の手前)の駐車場

赤岳山荘で食事をして、赤岳鉱泉までは2ピッチ。さすがに雪は2ピッチ目から少し出てきた。登山道は氷が出てきてアイゼンが欲しいところである。登山客は下から上ってくるのは2パーティーのみで、下山してくるのは4パーティーくらいである。

赤岳鉱泉は5張ほど天幕が張ってあった。天気が荒れることを想定して張り綱は石を拾ってきてしっかり張った。アイスクャンディというらしい、アイスクライミングができる人工の高さが10メートルほどの造形物があった。上から水を霧状に噴霧しているのだ。いろいろな形状に作られ2パーティーがトレーニングをしていた。氷のトレーニングならこれもいいかなと思った。



赤岳鉱泉にあったアイスクャンディ(美濃戸の赤岳山荘にもあった)

12月27日

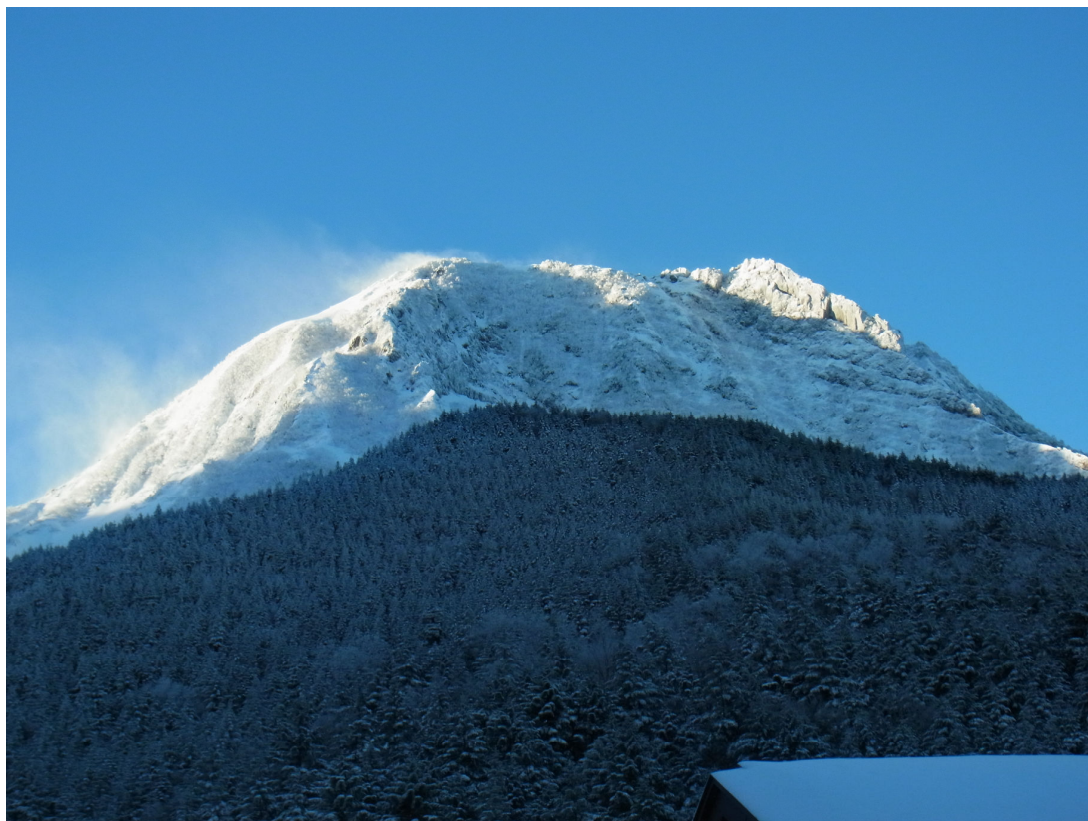
昨夜は上空や稜線の方からかなりの風の音が聞こえたが、場所がいいのかここは無風状態であった。早朝からの細かいみぞれが雨に変わった。外張りをうつ雨音が傘の中にいるようだ、富岡が言ったように結構いい降りである。さすがに冬にこれでは動けない。様子を見ていたが停滞することにした。天幕は2~3人用の新品である。やはり二人では1~2人用の天幕ではせまい。外張りも新調した。この雨ではフライの方がいいが、まさか雨に降られるとは思わなかった。はじめて外張りを使ったが、なんとなくテント1枚より暖かさが実感できる。それに霜も天幕内に張らなかったが今回は参考にならない。これから大事に使おう。これなら一人の山行でも

使用できる。テント場は風もないが、午後2時くらいから雪になった。明日のルートはどうなるのだろう。一応赤岳から硫黄岳まで縦走するつもりであるが、行ってから判断しよう。夜寝られなくなるので、夕食の時間を遅くしたが、二人とも夜に寝付かれないくらい朝から快適でよく寝た。

4月30日

明るくなったら出発しようと、4時半に起床。この場所なら天幕もこのままでよいだろう。食事をすませ、張り綱を少し直して、6時半に出発。小屋の前を通過して、行者小屋に向かう。キャップライトの光がすぐに必要なくなる。前にだれも歩いていないがルートは顕著である。

1ピッチで業者小屋に到着。天気がよく青空に稜線がきれいであるが稜線の雪煙が気になる。



朝日を浴びる阿弥陀岳。雪煙が風の強さを教えてくれる。

文三郎尾根は急である。一番先に取り付いた。下部は特別に悪くもなく、富岡が快調に上っていく。上部に行くのにしたが急になってくる。トレースは彼の2歩に自分は3歩で合わせる。そのうちに後続パーティーに私のみ追い抜かれる。単独を含め4パーティー15人くらいか。

だんだん表面が堅くなってくる。所々トラバス気味のところは緊張しながら上っていく。最後に稜線にでる長いトラバスぎみに右上するところで、最初に稜線に出た単独行が下ってくる。彼も硫黄岳まで縦走するつもりだったがあんな風は経験ないと言って降りてきた。先に稜線にでた、富岡がものすごい顔をして降りてきた。指がジンジンして風が強く無理ですと言う。顔はあごとホッペの肉が飛び出し膨らみ土色をしていて、短時間でこんなになるものかと、びっくりして降りるぞとトラバスの取り付きまで戻った。しかし目出帽子を直したら顔の形は戻り、安心したが笑えた。しかしあの色は確かに異常であった。他のパーティーも耐風姿勢をとるのが精一杯だったという。今日はもうやめにして、行者小屋まで戻った。一休みして赤岳鉱泉までもどり天幕を撤収して美濃戸まで降りた。途中も積雪があり、入山日と違っていた。林道では氷に足を取られ転びながら、美濃戸も戻ったらここも雪で景色が一変していた。美濃戸口までは来たときとちがい車がスリップしないように雪と氷路に神経を使いながら下った。